

第15回 豊川流域圏自然再生検討会

第14回 豊川流域圏自然再生検討会 主な意見と対応

重要種に係わる情報等については、原則非公開とさせていただきます

令和4年9月30日

国土交通省 中部地方整備局 豊橋河川事務所

第14回 豊川流域圏自然再生検討会（R3.9.29）

自然再生事業モニタリング調査結果に対する主な意見と対応（1）

項目	主な意見		対応状況
ヨシ原再生		・ 自然再生事業スケジュールに事業再評価の時期を記載すると、来年度以降の参考になる。	・ 今後のスケジュール表に事業再評価の実施時期を記載した。 （資料2 P.17） ・ 住民評価については、CVMのためのアンケート調査を実施中。
		・ 事業の価値を評価する上で、周辺住民の事業に対する評価を把握する必要がある。	
干潟再生		・ アサリ、ハマグリと底質粒径との相関図は、自然干潟と施工干潟に分けて示すと、新しく施工した場所の特性が明らかになる。また、底質の指標として一般的な強熱減量、空隙率等のデータも活用して多角的に生息状況を整理した方が良い。	・ アサリ、ハマグリ of 個体数について、底質の粒径に加えて強熱減量等との関係を解析して考察した。 （資料3 P.18）
		・ ハマグリと底質の経年変化の関係について、細砂分の増加に伴いハマグリが増加していると考察されているが、必ずしもそのようには見えない。	
		・ 平面流況解析により、今まで設定していた止水域は概ね妥当と思われるが、洪水時、平常時の堆積・洗堀傾向を流速だけで考察するのは難しい。	・ 図、コメントの堆積・洗堀の表現を流速が遅い・速いという表現に修正した。
		・ 干潟の河床変動を考察するのであれば、摩擦速度（ u^* ）等も考慮する必要がある。流速差だけで堆積・洗堀傾向を表現するのは難しく、説明の図として適切ではない。	

※対応状況の内、赤字は本年度の対応内容、黒字は昨年度対応して各委員から了承を得ている事項を示す。

自然再生事業モニタリング調査結果に対する主な意見と対応（2）

項目	主な意見	対応状況
干潟再生	干潟の土砂量と前年最大流量との関係図について、R2年の流量が間違っていないか。前年の流量が多いと土砂量が多い傾向は合っていると思われるが、流量が少ない年は説明が難しい。	図のR2の流量を修正した。
	河口部の干潟から流出した土砂は、昭和40年代に存在していた河口部沖側の干潟再生に寄与していると考察されているが、干潟再生で投入した土砂量に注意して考察する必要がある。	コメントを修正した。
	分流堰上流付近は地形的に土砂が溜まりやすく地形変化も大きい。干潟の土砂の堆積状況はもう少しマクロに把握すると良い。	- 豊川の土砂動態の現状として、下流の横断形状や河床材料から河道特性（二極化の進行、河床勾配の変化、樹林化）を整理し、土砂供給量の変化の要因を考察した。（資料3 P.11、12、参考資料） - 潮汐や河川流による底質移動の解析モデルは技術的に困難であるため、今後の課題とする。
	干潟の粒度組成は、本川側は細砂が多く、放水路側は細粒分がない。上流からの土砂供給に変わりがないとすれば、流れが影響しているのか、それとも潮汐が影響しているのか。	
	放水路と本川とでは河床材料の運ばれ方がおそらく異なっている。本川側の土砂移動は簡単な一次元解析でも想定できるのではないか。もしくは、河床材料を見るだけでも本川側と放水路側で供給される粒径が推測できる。	

※対応状況の内、赤字は本年度の対応内容、黒字は昨年度対応して各委員から了承を得ている事項を示す。

自然再生事業モニタリング調査結果に対する主な意見と対応（3）

項目	主な意見	対応状況
アサリ 着底 稚貝 調査	稚貝の初期着底期の餌料がその後の稚貝の生残に影響するということが明らかになってきたが、餌料となる$0.2\sim 20\mu\text{m}$のピコ・ナノプランクトンが河口部でよく発生する理由については科学的に未解明であり、今後に期待したい。本調査で得られている他の水質項目と合わせて多面的な解析をしてもらいたい。	各態の栄養塩とプランクトンの経年データが蓄積にあわせて、関係性を解析、考察した。 (資料4 P.16～20)
	既往知見によると、底質の空隙率が高い地点では底質下層でもアサリが確認されている。稚貝の移動については、文献調査も含めて来年度も継続して調査を行う必要がある。	5季目調査の底質表層・下層のアサリ個体数と底質の関係を整理し、稚貝の移動を考察した。 (資料4 P.13、14)
	3月までに河口部に移動した着底稚貝にとって、3～4月は稚貝の生息に重要な時期であり、餌料環境の調査を3～4月も2回実施できると、その時期にナノ・ピコプランクトンの増殖理由を考察する際の参考になる。	春季や冬季の餌料環境については、稚貝移動のメカニズムが概ね把握できた時点からの検討とし、5季目調査では初期着底期である秋季に重点を置いて、10～11月のみ月2回の調査とする。
	冬場の河口域におけるアサリの生残を検討するためには、冬季についても月1回の調査頻度では少ないので、今後検討する必要があると思われる。	

※対応状況の内、赤字は本年度の対応内容、黒字は昨年度対応して各委員から了承を得ている事項を示す。